

が、その時その時の歴史の中に生長しつゝ、如何なる點を或は愛の理想を求めて作りなされたかを一層深く知る事が出来よう。

たゞ附録第二の石刻録以下について述べべき事は多いが餘り冗漫になる故、今はそれらが古文書として稱すべき史料が殆んど傳はらぬ支那に於いて南北朝、隋唐の中央文化域に於ける宗教生活を見るべき一等史料として極めて貴重である事を述べ、一〇四七號に及ぶ刻銘判讀の苦心を謝して筆をおく事とする。(四六四倍、昭和十六年八月、座右寶刊行會發行、定價金四十四圓)(岡田芳三郎)

上都

蒙古ドロンノールに於ける元代都址の調査

(東方考古學叢刊、乙種第二册)

原 人
井 淑
和 愛
著

本書一冊は、内蒙省ドロンノールの西北閃電河々畔にのこされた元の上都を、親しく考古學的に調査された、その報告書である。おもへば游牧の民、蒙古族はそのむかし、オノン、ケルレンの河域に興起し、亞歐大陸をその馬蹄に蹂躪したが、もともと都城といふやうなものをもたなかつた。しかし、増大する國力の象徴として、太宗即位の七年(西曆一二三五)はじめて國都、富殿がいとなまされたのは外蒙オルコン河畔のカラコルムであつた。ついで憲宗蒙哥の六年(西曆一二五六)弟忽必烈はこの閃電河畔の龍岡に己が居城をいとたみ、憲宗の崩後、こゝに即位し、しばしこのとこ

ろを國都としたが、至元四年(西曆一二六七年)いまの北京に、大帝國にふさはしい大都の經營をはじめてから、こゝを上都とした。上都は、その後も避暑の陪都として、たゞ重要性をたもつてゐたが、元の末帝、順帝至正十八年(西曆一三五八)紅巾の賊に焚かれてからは、まもなく元は滅亡、ひきつゞく蒙古民族の不振で、その後この地に據るものなく荒涼なる原野にのこる廢都としてながい年月がながれたのである。

はるか蒙古高原の、荒涼たる砂丘や草原の間にいまはねむる廢都、そのむかし、マルコ・ポーロがうつくしくもかたる上都。それは歴史家の探求慾をそゝるに充分なものがある。すでに一八七二年ブッシュェル(S. W. Bushell)の踏査があり、ついでポツドニフ(A. Pozdniev) キャンベル(C. W. Campbell)の調査がありまた明治四十年には桑原隲藏博士、鳥居龍藏博士もこゝを訪ねられたが、近くは一九二五年にインペイ氏(L. Impey)の詳細なる調査があつた。だんだんほしいいことがわかつてきたが、決して調査の必要は減じなかつた、かへつて、ますます、その興味があふられ、その重要性が知られてきた。それは元代の遺蹟をそのまゝ、づぶにのこしてゐる土地として、また元一代の比較的純粹な標準遺蹟として、研究の上からもつよくマークせられたのである。

しかるに、昭和十二年六月、原田淑人博士を主筆とし、駒井和愛、小林知生、赤堀英三、末水雅雄、島村孝三郎諸氏を隊員として、東亞考古學會の上都調査隊が編成され、北支の風雲急をつけつゝあるさなか、一意この遺蹟の究明に従事され、その後支那事

變の進行のうちに整理研究がすゝめられ、四年有半いまこゝにこの報告書の刊行をみるに至つたことはまことに慶賀すべきことである。

それによるとこの上都の外城は石築方形、一邊の長さ十二町四十四間、南北おのおの一門、東西おのおの二門、みな薮城のあとをとゞめ、角樓四座、敵樓各六座もあきらかにみとめられる。内城はそのほぼ中央後よりにあり、東西五町六間、南北五町三十六間の長方形、東西南におのおの一門あり、薮築、城角に角樓はあるが、薮城と敵樓とはない。内城のなかには各私の建築遺址が相ならび、歴々としてその迹をたどることができ、位置は錯然としてをり、その配置に一定の企劃があつたとはみえないし、また文獻にみえる宮殿官衙の名にも比定することができない。

禁苑は外城西方から北方にわたり、廣袤約八十五萬坪、土城をめぐらし、濠をうがち、北に二門、西南各一門の門をひらき、門にはみな薮城がある。

外城東北隅と西北隅には一對の寺院址あり、前者は龍光華嚴寺後者は乾元寺に比しうる、東南隅、西南隅の建築址もまた「華嚴寺碑」にみえる東西一對の老子宮であらうかといふ。

なほ都城採集の遺物は石彫、瓦、磁であるが、粗樸な、しかし雄勁な石彫唐草文、コバルト青の釉瓦、均窯、影青、龍泉窯の陶磁片など、みなありし日の元朝文化をかたるものとして興味があふかい。

なほ附録に駒井和愛氏の「熱河瀋平縣附近の遺跡」、石田幹之助

氏の「元の上都に關する主要文籍解題」の二篇をおさめてみる。

いまや、滿洲事變、支那事變を契機として、蒙古民族は覺醒し蒙古政府が樹立された。新しき蒙古の胎動が感ぜられるとき、あくまでこの蒙古民族の自覺と躍進とを期待してゐるわが國の學者によつて蒙古民族の光榮ある古都、閃電河畔にねむつてゐた上都の余貌が、こゝに闡明されたことは決して意味の少ないものではないからう。これこそ正に學術が、文化建設にふれる一編であるといへよう。それにしても上都の調査研究について、さらに要望されるのは上都の重要さにおさおさおとらぬその大都、つまり北京の調査研究であつて、事變後急速な變化をかうむりつゝある上都の遺構は至急徹底的な調査をおこなはなければ、憾を永遠にのこすことになるであらう。(四六倍判一二六頁、圖版七五、昭和十六年十一月刊、塵右寶刊行會發賣、定價二十圓)(水野清一)

法隆寺論攷(文學博士喜田貞吉選集一)

喜田 新 六編

法隆寺再建非再建論争史

足 立 康編

いま此の二つの書物を纏めて紹介することは、一つの意義を認めるが故である。前者の發行後約一年を経て上梓された後者は、もと法隆寺論争の推移をその中心人物たる關野・平子・喜田等諸